

海外研修報告書

青野 聡

1

2005年の4月から2006年の3月までロンドン大学の……関係する人たちに『ソーアス』の名でよばれている東洋アフリカ研究校 SOAS に academic visitor として在籍しました。日本研究部門のチーフは本大学に客員教授としてこられているティモシー・スクリーチ氏です。彼の専門の江戸美術史を中心に文学、宗教、歴史学、考古学など、幅広い層で講義がおこなわれていて、文学のジャンルではイタリア、ドイツ、アメリカなどの大学から研究発表に講師がくる活況ぶりです。ロンドン市内という立地条件のよさもあるのでしょう、出入りのにぎわいは研究や調べごとをするうえで良い励みになります。学生にはイギリスに残って学問、研究をつづける意志をもった日本人留学生もおります、また日本語がよくできる諸外国からの学生もいて、きちんとした日本語による授業があったならば、どんなに実りがあることかという想いに幾度となくとらわれました。(本大学から定期的に……期間は短くとも講師を送ることができるようになれば、ということです)。

付属する図書館は近代日本文学の資料が豊富で、江戸の戯作、物語文学が、イギリスやロシアやドイツの文学の影響のもとで誕生した近代小説にとってかわられていく過程を、集中的に勉強することができました。想定していなかった喜ばしい出来事で、日本にいたならばこういう機会は……資料と時間の二点で、もちえない、これからももてないだろうとおもわれます。それにまた、調べたいことのひとつだったインド、ビルマ、中国にまたがる広い地帯で暮らしている少数民族に関する資料がおもっていた以上に豊かであることに嬉しく驚きました。わが国では悲惨な戦史として省略して語られている半世紀前の大戦の「インパール作戦」のインパールはインド側のナガ族の町です。インパールでの戦闘の細部についてもそうですが、現地人であるナガ族については語られることがありませんでした。侵略はするけれど現地の文化には目をむけないという帝国陸軍の姿勢。ここが欧米との差で、一方の当事国だったイギリスは専門家が、言語、習俗、物語など、いわば文化人類学的な視野で資料を集めております。戦闘に参加した兵士たちも、闘いに勝利した感動をもとに書物をのこしております。個人史のレベルとはいえ資料にはなります。

ともに低地チベット族とくくられているビルマ側のナガ族とインド側のナガ族。じつは別の民族なのではないかという説もあります。ぼくはいまアジアに「奥地」というところがあるとするならばナガ族が住むこの一帯をおいてほかにないと考えております。研究の成果は長編小説「海亀に乗った闘牛師」のなかで『チチル族』として描かれている部族のモデルに昇華されております。

ぼくが妻子と住んだロンドン北部の住宅街……大学のあるラッセル・スクエアから地下鉄ピカデリー線で一本のサウスゲートのあたりは、ほとんどの住民が非イギリス人です。純粹のイギリス人はまったくいないのではないかと、冗談まじりにそんなことが話題になるところで、トルコ、ギリシア、ロシア、イタリア、インド、中国、モロッコ、エジプト、それから黒いアフリカからの住人が多く、そこにさらに職をもとめて東欧諸国から働き手がぞくぞくとやってきているという現状です。バスに乗るとさまざまな言語がいきかって、イギリス訛りの英語はまずは耳にはいってきません。25年ほど前にロンドンに滞在したときとはまるで様相がちがう。ユーゴスラビア紛争のころから顕著になった変化だと教えられました。おかげでそれぞれが母国語にくらべたらずっと不自由な英語を共通語としていう、ねがってもない環境に身をおくことができました。生活面では「わかりやすい英語」をはなしているのが助かりすま。その一方、文化の翻訳という点で、翻訳しきれない「こころ」の領域のことがらや、肉体から剥奪された故郷の自然といったことなど、ストレスになる材料が多く、随所でコミュニケーションの渇きをなんとかしようという、小さな地域共同体の単位での活動がみられます。コミュニケーションは「やりとり」です。異文化の境界をこえたやりとり、ジャンルをこえたやりとり、性をこえたやりとり、言語をこえたやりとり。どれも肉体を媒介してはじめてうまくいく性質のもので、演劇は当然として、ヨガや太極拳、スポーツといった身体の鍛練に意識がむくのは自然です。ドラマづくりへのヒントがいっぱいありました。

ぼくがかかえている「小説からドラマへ」というテーマは、文化人類学者の青木保氏と対談本「地球の尻尾を掴む」をつくったときにさかのぼります。フィールド・ワークでこもったタイの山岳部に住む少数民族について、このようなことを教わりました。ある部族は文字をおぼえて低地におりていき、物質的には豊かになった、しかし部族の文化は失った、その一方、タイ政府の同化政策を拒んで無文字文化をいきつづけている別の山岳民族は、いまだに貧しさの極みにあるが、独自の言語をはなし、独自の衣裳を着て、種族の祭りを絶やすことがない……。いわば種族的アイデンティティーにかかわることです。しかしどうもそれだけではない。人間の文化にかかわる普遍的な課題がかくれています。

文字をおぼえることで文化を失うとは、いったいどういうことなんだろう？ 言い方をかえると、読み書きの能力がない……イリテレートであることで文化が保たれるというのはどういうことなんだろう？ さらにことばを進めると、イリテレートというのは人間にとって魅力的な存在のありようなんじゃないのか？ ということです。いまはどの国も国民のイリテレートが占める比率が高いことを恥とする傾向にあります。教育とはすなわち文字をおぼえることである、と決めつけているのでしょう。それはそれです。イリテレートは知能の遅れを意味しません。むしろイリテレートのほうが、コミュニケーションを大切にして、コミュニケーションをとる態度こそが人間が人間であることととらえて

いるのではないかとおもわれる……と、仮説をたててみたくなります。用件を会って伝えるのと、書面にして送って伝えるのとの違い。どちらが「現在」を濃く生きているかと問いかけてみると、おのずとはっきりしてくることがあります。すでに大昔プラトンが「パイドロス」のなかで、ソクラテスが語ったというスタイルで、文字をおぼえることで知恵を失うと書いていて、問題提起はなされていました。ソクラテスが、孔子やキリストや仏陀と同様に、聴衆にむけてよく語りはしたが自らは文章を書かなかった、という事実を重ねると意味が深まりそうな予感がしますが、なにぶんにもこれより先には展開しがたいことがらなので、いつの時代にも指摘する人はいる、だがそこまで、というくりかえしだったようです。ルソーも「文字は言語の語をかえることはないが魂をかえてしまう」といっている……いいはしますが、所詮は言語で仕事をする人なので、だからどうだと論をすすめることはできなかつた。それは仕方ないことです。

階段をのぼりつづけるためには踊り場を設定して、足踏みして、角度をかえてのぼるのがコツです。ぼくもまた言語で仕事をする身。イリテレートをまっこうからとりあげたところで、できるのは擁護論をぶつことぐらいでしょう。そうではなく、われわれもまたイリテレー的な状態を生きているときがある、そういうときこそが、その人のもっとも美しく、魅力があって、輝いているときである、という考え……隠喩を立てて創造の場に活かすことはできないだろうかということです。読んだり書いたりする能力がおのずと「オフ」になる、他人とともにいる「今」というこの場この時に没頭して躍動している状態。「現在」しかない状態です。おもしろいことに、小説の登場人物で魅力がある……作者が魅力的に描いている人物は、おうおうにしてその人が読み書きしている場面を想像するのがむずかしい、というタイプの人物なのです。暴力的な人、本能でうごく人、肉体がなによりも優先して世界にかかわっていく人、人のためになることだけを考え実践している善意のかたまりのような人、夢の時間のなかで生きているかのような人……。もちろん作者はイリテレートを意識しているのではなく、知らずに自分のアンチテーゼとして創りあげてしまうのでしょう。坂口安吾「白痴」、安部公房の「砂の女」、深沢七郎の「楢山節考」、谷崎潤一郎「痴人の愛」、大江健三郎の「狩猟で暮らしたわれらが先祖」など、世界に知られている数多くの文学作品の主要な登場人物にみられます。

3

フランス人言語学者クロード・アジェージュによると、世界には現在約5000の言語がある。そのうちの約25の言語が毎年死んでいて、今世紀末には2500しか残らない。もっと悲観的に、消失のテンポが加速していることから、95パーセント失われて500ほどしか残らないだろう予想する学者もいるようです。言語学者のいう「言語」は、小説の取材旅行でいったパプアニューギニアでいくつかの部族と接した経験から、ぼくには

たいした違いがあるようにはおもわれない複数の部族の言語を、それぞれ独立した言語とみなすふしがあって、感覚的には素直に信ずることがむずかしいのですが、いくつもの言語がこの100年で消えていったのはたしかなことらしく、それは日本において方言が消えつつある……あるいは薄まってきている事実をおもくと納得できます。作家は本能的に言語の単一化には対抗します。おりしも沖縄から沖縄のことばを活かしたすぐれた作品がでてきたこともあって、方言に光をあてた作品が増えつつあります。小説のどこで方言がつかわれるかといえば、会話です。アメリカではすでに黒人のあいだでしか通用しない独特の用語、用法を大胆に地の文……記述の文章でつかう試みがなされています。ヒスパニック系もまた、彼らのあいだで日常つかわれている英語とスペイン語がまざりあった、一種のピジンをとりこんだふしぎな言文一致体の英語で小説を書く作家が誕生しています。（日本では太宰治が津軽ことばをつかった実験的な短編をのこしているくらいでしょうか）

ぼく自身はどんなに脳を答うっても、日本語が地上から消えた状態を想像することはできません。およそ100年前に石川啄木は「ふるさとの訛りなつかし停車場の人ごみの中にそを聴きにいく」とうたいました。岩手のことばをききたくなくて上野駅の雑踏のなかにはいっていく心の風土。ロンドンではそのように日本語を耳にしたくて、日本人らしい二人連れ、三人連れをみかけると、なにげない素振りで、話されている言語がわかる距離まで近づいていくということが、公園やバスのなかで何回かありました。英語になじんでいない妻は、日本人をみかけることがめったにない地域に住んでいるうえに、育児疲れ（ロンドンに着いたときは生後七カ月でした）と、友だちのいない孤独感に参って精神の傾きがあやくなり、その感情が強まったようです。母国語には揺るぎない力があります。存在そのものである、といってもいいようにさえおもわれます。けれどもロンドンにいるあいだは、その言語アイデンティティーをひとまず閉じて……しばらくは読まない決めて本を閉じるぐあいに……共通語である英語を自身の中心に通さなければなりません。外国人の大半がおなじ在りようで、なかには母国に帰ることはない決めた移民がいます、帰るに帰れない亡命者もおります。それから語彙が極端に少ない言語であるために、つかう機会がないまま年月がたって、おもいだすこともなく、ついには忘れてしまう人もいるでしょう。アジアの少数民族がそうであるように。スーパーマーケットでの買い物を通じて知りあった、そこでではたらくビルマからきたカチン族の若者は、すでに親たちがはなし、自分も少年時代まではなしていた多くの単語を忘れてしまって、そのことを照れていました。こうした人たちにとっては、充実したコミュニケーションをもつことがロンドンにおける「生」です。それなくしては幸福はありません。演出家ピーター・ブルックがいろんな国の役者を集めて言語らしい言語は一切つかわない芝居……舞台をつくりあげたのは、こうした事態を先取りしてのことでした。ポーランドの演出家グロトフスキーのもとで学んだポール・ステッピングズがあとにつづき、ロンドンで彼の劇団を旗揚げしたのもおなじです。芸術家の仕事はしばしば社会にたいして預言的にかかわるものです。

文化の翻訳といえばだいたい言語上の翻訳で、誤訳はつきものです。1816年に琉球にきて一か月滞在したバジル・ホールの「朝鮮琉球航海記」は、いま読んで観測と観察の目の正確さに感動する傑出した琉球紀行です、と同時にユーモアではないのかと勘繰りたくなる文化の誤訳をしています。愛情にみちみちた結果なのでしょう。新しい世界はコンタクトをとろうとする者の心ひとつで見えかたが変わることのいい例で、のちに力でむりやりこじあげたアメリカのペルリ提督とは対照的です。「はじめのうちは距離をとって控えめにしていたほうが、あとになって自由な、心の通った関係を結ぶことができる」。イギリス人らしさをこのようにあらわした彼に、琉球は武器も貨幣もない平和な楽園とうつりました。動きを制限されて町のにぎわいのなかにいれてもらえず、琉球人のやんわりとした防衛線の外側からみて、そのとおりに信じたのです。彼の航海記を読んで、なにがしかの期待を抱いて琉球を訪れたのちの人びとに、事実を書いたものではないと大いに批判されるのですが、それは別問題です。ホールは故郷イギリスに帰るまえに、南半球のセントヘレナ島に流されたナポレオンを表敬訪問しています。東洋にたいする好奇心の強いナポレオンに中国や朝鮮について語り、そのうちに話題が琉球にうつると、ナポレオンは身を乗りだし、途中から表情がかわりました。琉球には武器も貨幣もなく、人びとは絶対の平和を生きているときいて飛びあがらんばかりに驚いたのです。この4年後にナポレオンは死にますが、武力によって帝国をつくりあげた彼は、いま滅びの坂を転がりはじめ、気力をはじめとしててなにもかもが衰退していくなかで、武器のない東洋の「蓬莱島」をどんなふうに夢想したのでしょうか。ここまでくればホールの誤訳は次元がかわってひとつの「成果」だったといいたいくなります。

「閣下、琉球の人はナポレオンのナの字も知りません」とホールがいったときに、ナポレオンはここ何カ月ものあいだきいたことのない大きな声で笑った……と、ナポレオンにつきそっていたベルトラン伯爵が書いています。じつのところは、わかっているのはそれぐらいで、あとは想像です。パリを訪問した目的のひとつは国会図書館で、会見についての詳細が知れるかもしれない資料を探して目を通すことでした。ぼくが想像しているような夢の多い愉快なやりとりがあったという資料はみつかりませんでした。みつからないということは、そういうやりとりがなかったことにはならない、とへ理屈を弄して、そのほうが創作の力になるといっておきたいとおもいます。異世界を旅して現世で楽園をみてしまった人にありがちな、精神病院で死をむかえるという晩年。そこにいたるまでの彼のインドやアメリカへの旅行が、琉球文化の美しい誤訳にはじまった「ここではないかどこか」への憧れにあった、それだけに失望したときの反動は大きく、結果として紀行文の質が低下するなり、当事国の反感をかうといった事態になった、ということがわかったのは喜ばしいことです。

現在準備している共通教育学科の演劇の講座には「演劇」ではなく「ドラマ」の文字をつかうことにしました。たとえ日本人同士であっても個人と個人は異文化であるという認識にもとずいて、日本語という言語の共通性にはたよらずに、身体に翻訳された言語だけでコミュニケーションをつくりあげよう。つくられていくその場を演劇の舞台としよう。そんなふうに授業として可能な演劇の実践を構想しながら、若い人たちの演劇をみて意を強くしました。ロンドンの北部にあるミドルセックス大学で THEATER ARTS に励む大学院生の現場を。パリでは、イギリスを去ってパリに拠点をうつしたピーター・ブルックの影響下にある人たちの活動を。バルセロナでは世界各地から集まってきたアーティストが路上で展開する、ポップ・カルチャーの影響下の演劇です。なかでも時代感覚に繊細な20代の留学生たちが、おたがいのナショナルな世界をぶつけあうことで「イリテレーツ的」な、インターナショナルなドラマの空間をつくりあげようと努力している、ミドルセックス大学の創作現場からはいい刺激を受けました。道具立てはいたって単純。かかわる学生たちが日常で手にふれている小道具が二つか三つあればいいのです。ドラマが成立しないことには失敗ですから、登場する人は二人以上、多くても三人ぐらい。それで、たとえば中華鍋であったり、急須であったり、箒であったりの小道具と机をあいだにして、口から発するのは単調な声だけという条件でドラマをつくりあげるのです。パフォーマーと演出する人の対話だけで構想が形をなしていったら、中華鍋は中華鍋にはじまって、舟にもなるし、妊婦の腹にもなるし、ギターにもなります。急須は新鮮な血を送り出す心臓になるでしょうし、医者の方箋にもなります。レターボックスや受話器にだってなるでしょう。パフォーマーの身体はあたかもことば以前の領域で活動しているかのようですが、ドラマであるということは合一とズレの繰り返しですから、そこには言語的な解釈がはいりやすく、パフォーマーが頭のなかで考えていることが観客には手にとるようにわかる……わかったように感ずるといえることがあるでしょう。それも「ドラマ」の楽しさになるはず。ぼくが大学にもどってすることはまず、身体を楽にすることができる学生をみつけることです。三拍子で優雅に歩く、四拍子で軽やかに歩く。カモシカのように走る。飛ぶように走る。「カラスになって啼いて」といったら即座にカラスになって啼ける。みられながら力を自在に抜くことができる、そういう柔軟な精神状態にはいれる学生をみつけることからでしょう。こうしてプログラムを検討しているだけでも高揚してくるものがあります。

ベルギーではアントワープのプランタン・モレトゥス博物館に通い、めざましい量の手写本をふくむ蔵書と、絵画のコレクションを見学するかたわら、「ねむれ巴里」を書いた金子光晴のブラッセルとアントワープの足どりを追いました。金子光晴はまったくの無名だったぼくの処女作品集に跋を書いてくれた詩人で、ぼくが作家論を書くことを計画している唯一の日本人作家であります。

演劇に関しては、アントワープはユダヤ正統派の一大拠点であります、大きく分ければ

ユダヤ神秘主義とくられるグループの若い人たちに会って、ユダヤ人の安息日……サバトの演劇性について話をききました。ユダヤ人歴史学者が「ユダヤ人が二千年もつづいた苦難の時代を生き抜いてこれたのは、サバトがあったからである、毎週金曜から土曜にかけてのこの安息日には、おのおのが歴史上のなりたい人物に、王子でもお姫さまでも、なんにでもなれるのである」と書いているのを読んだときから、家庭でどんなふうに行うかが実践されていたのだろうか、と継続してもちつづけたい関心事でした。それからまた、いまや神話のように語られている Physical Theater……肉体演技法を確立したグロトフキーは、19世紀にポーランドで起きたユダヤ神秘主義運動、ハシディズムの「神の時間にはいる」信仰実践からヒントをえたという直感に根ざした確信めいたものがあって、もしかしたら演劇と宗教の隙間をうめる「ことば」をきくことができるのではないかという期待があったのです。

なりたい人物を歴史のなかにみつける……かぎられときに、かぎられたあいだだけその人物になってしまう……それが絶望をのりこえる「幸福」への契機となる。単純ではあるけれど、このように一直線に設定することで、演技論からは意識的に逸脱して、「新しい」芝居づくりに有効な「なにか」がみえてくるのではないだろうか？ ユダヤ人のサバトの場合には個人的な、どこまでいっても徹底して個人的なできごとであって、陶酔と浄化はあるでしょうが、他者とのあいだにドラマが展開するということはありません。演劇的にはみえても、演劇ではないのです。宗教家とはなしているときにしばしば経験するもどかしさがここでもふくらみ、相手は信仰とは無縁なぼくの芸術観や演劇観などはどうでもよく、きくことに専念する場になってしまいました。大いに想像力をかきたてられました。

こういうことです。先にあげたドラマは、ことば以前の「物」を媒介として、複数のパフォーマンスの無意識や潜在意識を掘り起こして身体で、口から発するのは単純な音声と条件づけてコミュニケーションもつ、そこにドラマが発声するということでした。たいしてこちらは、複数のパフォーマンスがそれぞれ自己と深く対話をするを通じて、このような人間に「なりたい」という役（人物像）をみつけだす、そのことが第一のステップで、第二のステップは限られた場所で限られた時間、その人物に「なってしまう」ということです。第三のステップは、自分の欲求にしたがってなった新しい人物（役）同士が会うことで、ドラマをつくりあげていく、いわば台本（プラン）づくりです。ここではことばが道具となります。構成して演出する側の第一の仕事は、それが可能になる場をつくってあげること、つぎの仕事はそうした役者が何人か集まったところで対話の場をつくり、さまざまな意識の層でのコミュニケーションをはかって、ドラマを組み立てていくことです。「なれるものならなってしまう」ところで願っている人物になりきってしまう、そういう者たちだからこそつくりうる舞台空間です。どんな台本がつくられるのかは、なりたい人物になった役者しだい。まったく予想がつかない。最終的にはすべて学生自身がすることですが、そこに至るまでの道筋をつくる過程をおもくと楽しくなってきます。ユダヤ人の場合は子供時代から親しんできた旧約聖書を中心とした豊富な「文学」があります。

なってみたい……演じたい役はおのずとみつかるでしょう。日本の大学生はどうでしょうか。なんともいえないところですが、なってみたい……演じたい人物像をみつけだす営みが創造につながっていくということは、はっきりいえます。

5

アジアの「最」奥地に住む一種族としてナガ族をモデルにしたこととともに、バジル・ホールとナポレオンの会談も長編小説「海亀に乗った闘牛師」に描かれております。（何月号になるかはまだ知らされておりませんが、これを書いている4月の中旬にはすでにゲラの校正を終了しております）。この小説の作者が「小説からドラマへ」というテーマをかかえているらしいということは、二人の主要な登場人物……「ぼく」と「チチル族の族長」とのやりとりを読むと……このように種をあかしたあとならば……よく理解していただけるとおもいます。現在は「ロンドン滞在記」を執筆中です。なお、ナガ族についてはアジア最奥の地に住む精霊信仰を生きている民という観点で、これからも取材（調査、研究）をします。とくにビルマ側のナガに、なんとしてもはிரりたいという欲望を強くしました。現在は軍事政権下で行動が規制されて機会をつくるのがむずかしく、ナガ族の文芸美術（テキスタイル、工芸、民話、言語など）を研究するという名目でチームをつくって許可をとる以外にはないようにおもわれますが、熱い眼差しをむけつづけます。

充実した一年間でした。この十年ほどををふりかえて、もっとも実りのあった一年間だったといえます。この機会をいただけたことを深く感謝しております。ありがとうございました。

2006年4月23日